

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02907

研究課題名（和文）健康障害児の自尊感情を支える教科指導プログラムの開発

研究課題名（英文）Fostering Self-Esteem through Subject-Based Instruction for Children with Health Impairments

研究代表者

八島 猛（Yashima, Takeshi）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00590358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、健康障害児の自尊感情を支える教科指導プログラムの開発を目的として、通院を要する学齢児8名に対する教科指導を行い、以下3点の示唆を得た。第1に、健康障害児の教科指導にあたっては、認知諸機能の評価とその状態に応じた学習支援が必要である。第2に、健康障害児の多くは自分自身の学業能力と行動の適切性を重視している。一方で、これらの領域が自尊感情に及ぼす影響については個人差がある。第3に、学習の開始と継続を促す遂行支援を伴う教科指導は、健康障害児の自尊感情の維持・向上に寄与する可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、次の4点において学術的・社会的な意義を有している。第1に、学校教育の中心的活動である教科指導は、健康障害児の自尊感情の育成に寄与し得ることを示した。第2に、健康障害児に対する教科指導上の配慮点として、教育機会の保障にとどまらず、認知機能の評価とその状態に応じた学習支援の必要性を示した。第3に、健康障害児の事例的な分析に基づいて、自尊感情の変動要因には個人差があることを示した。第4に、定型発達児や他の障害児を通じて得られた知見は、健康障害児の教科指導や学習支援に役立つ可能性を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to foster self-esteem in children with health impairments through subject instruction. In this study, tailored subject instruction was provided to eight children with health impairments based on their individual needs. As a result, the following three points were suggested. Firstly, in subject instruction targeting children with health impairments, it is necessary to assess their cognitive functions and provide learning support based on the characteristics of their cognitive abilities. Secondly, many children with health impairments evaluate scholastic competence and behavioral conduct as important domains. However, there are individual differences in the impact of these domains on self-esteem. Lastly, support for initiating and sustaining learning in subject instruction contributes to the improvement of self-esteem in children with health impairments.

研究分野：特別支援教育

キーワード：特別支援教育 自尊感情 教科指導プログラム 健康障害児

1. 研究開始当初の背景

自尊感情とは「自分は価値ある人間だ」等、自己全体を自己評価した時に生じる満足感のことであり、自己を肯定的に評価している人ほど自尊感情は高いといえる。健康障害児においては、児童・青年期の自尊感情が人生満足度と不安を予測することが明らかにされている (Dahlbeck & Lightsey, 2008)。一方で、一部の疾患においては、自尊感情が一般集団よりも顕著に低いことが報告されている (Pinquart, 2013)。また、10代の自尊感情に関する縦断調査によると、一般集団の自尊感情は12歳まで低下し、以降は徐々に回復して14歳以降上昇に転じるのに対して、健康障害児の自尊感情はいずれの年齢においても一般集団よりも低く、10代を通して低下し続ける (Ferro & Boyle, 2013)。これらのことは、健康障害児の長期的予後の検討にあたり、この時期の自尊感情に注目することの重要性と、その維持・向上のための支援及び支援の観点について検討する必要があることを示している。

児童・青年期における自尊感情の形成・変動要因に注目すると、自尊感情はさまざまな生活経験の蓄積によって形成され、発達的に変動することが報告されている。Harter (1999) は自尊感情を含む自己概念の生涯発達過程を質問紙調査により検討し、児童・青年期における自尊感情の規定因について報告した。これによると、この時期の自尊感情は自分にとって重要な領域において成功していると感じるほど高くなり、失敗していると感じるほど低くなる。つまり、自尊感情は個人にとって重要な領域における有能感に規定される。また、児童・青年期の自尊感情に影響を及ぼす領域は「学業」「友人」「運動」「外見」「行動」の5領域であり、いずれの領域も有能感が高いほど自尊感情は高くなる。

本研究では自尊感情との関連が高い5領域の中でも特に学業領域に注目した。その理由は次の4点である。第1に、学業領域の重要性は社会的比較の獲得や両親の期待を反映し、児童後期から青年初期にかけて高まるためである (Harter, 1999)。自尊感情が重要な領域における有能感を反映するならば、学業領域への注目は妥当である。第2に、健康障害児の中には学業不振児が存在し、こうした子どもとその保護者は教科学習に不安を感じているためである (八島ら, 2011)。第3に、健康障害児に対する学業不振の対応策として、認知機能の個人差に配慮する必要があるためである。従来、健康障害児の学業不振は入院・通院による学習空白等、教育機会の制限が主な原因とされ、その保障が学校教育の意義と考えられてきた (文部省, 1994)。最近では、皮膚疾患や心疾患等、いくつかの身体症状を主徴とする疾患において、認知機能の問題や神経発達障害の併存が生じやすいという報告がみられるようになってきた (たとえば, Lehtonen et al., 2013)。第4に、近年、学業の有能感を高める指導法に関する知見が蓄積されてきたためである。たとえば、自己調整学習の理論的・実証的研究によれば、学習に対する関与度を高める指導が、学業の有能感、学習の継続性、成績を高めることが報告されている (Schunk & Zimmerman, 1998)。自尊感情が生活経験の蓄積によって形成・変動するならば、児童・青年期に重要性が高い学業の有能感向上は自尊感情の向上に寄与するものと思われる。

2. 研究の目的

本研究では、健康障害児の自尊感情を支える教科指導プログラムの開発に向けて、健康障害児を対象とする事例的検討を行い、次の3点を明らかにする。第1に、学習内容の習得を促す教科指導法を明らかにする。第2に、教科指導が自尊感情に及ぼす影響を明らかにする。第3に、自尊感情を支える教科指導プログラムを考案・適用し、その効果を検証する。なお、本研究では、病弱・身体虚弱 (文部科学省, 2013) の概念を参考として、健康障害児を「心身の病気により通院を要し、かつ本研究に参加する対象者の保護者が対象者を健康障害児として認識している者」とした。

3. 研究の方法

学習会の定期開催: 研究代表者が所属する大学の健康障害児を対象とする臨床実習 (以下、「臨床実習」) の授業の一環として、「学習会」を定期的に開催した。学習会では主として主要教科に支援ニーズのある健康障害児に対して、対象者と保護者が希望した教科指導を個別指導形態にて提供した。具体的には、原則として研究期間中の各年度5月から2月まで (8月と9月を除く) の約8か月間、週1回、約60~90分間の教科指導を行った。教科指導は、研究代表者の監督の下に、臨床実習を受講した大学院生が研究協力者として担当した。学習会は大学の学習室で開催し、対象者と保護者が来所して参加した。研究への参加募集は近隣の学校に要項を配布して保護者への周知を依頼し、保護者から参加希望の依頼があったものを対象者とした。研究期間中は年度途中の参加及び参加中止を可とした。

教科指導に関する状態把握: 事前アセスメントとして、対象者とその保護者から医学的診断名や教科指導上の配慮事項等の基本情報を収集した。対象者の教科指導場面において行動観察と学業に対する意識聴取を行った。また、効果的な教科指導法の検討のために、認知諸機能に関する各種検査を実施または既存の検査情報を収集した。

自尊感情及び関連変数の測定と評価: 教科指導が自尊感情に及ぼす影響を検討するために、自

己概念尺度（八島ら，2019）を実施した。また，必要に応じて学習動機づけ尺度等，自尊感情との関連が報告されている心理尺度を実施した。

教科指導プログラムの考案・適用と効果の検証：事前アセスメント，自己概念尺度の分析結果及び自尊感情・自己概念に関する諸理論に基づいて，各対象者の教科指導プログラムを考案し，対象者と保護者のニーズに応じた教科指導を行った。教科指導プログラムの効果は指導期間前後の学習内容の習得度と自己概念尺度得点の比較に基づいて評価した。自己概念尺度の分析対象は Sansom-Daly et al. (2012) を参考として，指導開始から3か月以上にわたり6回以上学習会に参加したものとした。

倫理的配慮：研究の目的と方法，本研究で得られた知見は各種学会や報告書等にて公表することを，保護者に対して口頭及び書面にて説明し，同意が得られたものを分析対象とした。本研究は上越教育大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 学習内容の習得を促す教科指導法

医学的診断名と対象者数：研究期間内に，脳性麻痺と気管支喘息の重複児1名，片頭痛と学習障害（読み書き）の重複児1名，先天性心疾患とADHDの重複児1名，神経線維腫症1型とADHD（不注意型）の重複児1名，眼疾患の疑い児1名，神経発達障害の疑い児3名の合計8名が研究に参加した。このことから，通常学級に在籍する健康障害児の中には，神経発達障害を併せ有する子どもが一定程度存在することが示された。

教科指導上の配慮事項：対象者に共通して「つかれやすい」など，学習時間の制限に関する情報を得た。このことは，教科指導における休憩時間確保の必要性を示している。

認知機能の特徴：表1は，KABC-2の認知尺度の標準得点と個人内差及び尺度間の比較結果を示したものである。認知総合尺度に注目すると平均より1SD未満の値を示すものが8名中6名存在し，そのうち平均より2SD未満の値を示すものは2名であった。個人内差と尺度間の比較結果より，対象者全員の尺度間に有意な偏りがあることが示された。これらのことは，教科学習に支援ニーズのある健康障害児の中には，認知諸機能の問題のために，学習に困難を示す者が少なからず存在することを示唆している。学習内容の習得を促す教科指導上の配慮として，教育機会の保障はもとより，認知諸機能の評価とその状態に応じた学習支援が必要であるといえる。

表1 KABC-IIの標準得点と個人内差及び尺度間の比較結果

対象者＼	認知総合	継次	同時	計画	学習	尺度間の比較
A	87	76 (PW)	100	93	97	継次<同時， 継次<計画， 継次<学習 同時=計画， 同時=学習， 計画=学習
B	70	68	79	84	69	継次=同時， 継次<計画， 継次=学習 同時=計画， 同時=学習， 計画>学習
C	87	87	95	73 (PW)	109 (PS)	継次=同時， 継次>計画， 継次<学習 同時>計画， 同時<学習， 計画<学習
D	78	82	95 (PS)	78	73	継次<同時， 継次=計画， 継次=学習 同時>計画， 同時>学習， 計画=学習
E	68	87 (PS)	68	73	61 (PW)	継次>同時， 継次>計画， 継次>学習 同時=計画， 同時=学習， 計画=学習
F	84	106 (PS)	73 (PW)	93	84	継次>同時， 継次>計画， 継次>学習 同時<計画， 同時=学習， 計画=学習
G	69	82 (PS)	61 (PW)	75	79	継次>同時， 継次=計画， 継次=学習 同時<計画， 同時<学習， 計画=学習
H	79	74 (PW)	77	75	109 (PS)	継次=同時， 継次=計画， 継次<学習 同時=計画， 同時<学習， 計画<学習

() 内は個人内差を示している。PSは個人内で強い能力，PWは個人内で弱い能力を示す。

(2) 教科指導が自尊感情に及ぼす影響

表2は，自己概念尺度の初回測定結果を対象者別に示したものである。本尺度の解釈として，重要度得点が3点以上の領域は個人にとって重要な領域とみなされる（Harter, 1999）。まず，対象者の重要度得点に注目すると，各領域で3点以上を示した者の人数は，学業領域6名，友人領域3名，運動領域5名，外見領域1名，行動領域6名であり，学業と行動領域を重視する者の人数は，他の領域よりも多いことが示された。次に，学業領域の有能感得点に注目すると，概して学年上昇に伴い得点低下が認められ，対象者GとHは八島ら（2019）における同領域の平均得点よりも1SD以上低い値を示していた。これらを勘案すると健康障害児の学業領域は学年上昇に伴って自尊感情に負の影響を及ぼしやすと考えられた。一方で，対象者GとHの自尊感情得点に注目すると，対象者Gは最大値の4点を示し，対象者Hは八島ら（2019）の同領域の平均得点よりも，1SD以上低い値を示していた。このことは，自尊感情の変動要因が個人によって異なるものであり，個別的な分析・検討が必要であることを示している。また，対象者

の多くが行動領域を重視していることから、教科指導を通して行動の適切性に関する自己評価を促す指導、たとえば、「課題や宿題をやり遂げた」など、遂行の実感が得られる機会を提供することが自尊感情の維持・向上に寄与するものと考えられた。

表2 自己概念尺度の初回測定結果

対象者	学年	重要度					有能感					自尊感情
		領域 学業	友人	運動	外見	行動	学業	友人	運動	外見	行動	
A	小学2年	2.50	1.00	4.00	1.00	4.00	2.50	2.00	1.50	1.00	2.00	1.33
B	小学4年	2.50	1.00	1.00	4.00	1.00	1.67	1.67	2.67	3.83	1.83	3.83
C	小学4年	3.50	3.50	4.00	2.50	3.50	3.67	3.50	4.00	3.83	3.67	3.50
D	小学6年	3.00	3.50	3.50	2.00	3.50	3.50	2.83	2.50	3.33	3.33	3.33
E	小学6年	3.50	4.00	3.50	2.50	4.00	3.00	3.33	3.00	2.33	2.17	3.33
F	中学2年	3.50	2.00	2.50	2.00	4.00	2.00	2.50	1.83	2.67	2.67	2.67
G	高校1年	4.00	4.00	3.00	2.50	4.00	1.33	4.00	2.33	4.00	3.33	4.00
H	高校3年	3.50	2.00	2.00	2.00	2.00	1.67	1.83	1.00	2.00	2.00	1.50

(3) 教科指導プログラムの考案・適用と効果の検証

教科指導プログラムの考案にあたり、対象者のニーズに応じた学習内容の教授に加え、個々の認知諸機能の状態に応じた学習支援を行った。また、学習の開始と継続を促す遂行支援を実施した。これは、対象者の多くが教科学習の重要性を認識しながらも、学習を開始することや、習慣として取り組むことに困難を示していたためである。

① 学習内容の習得度に対する教科指導プログラムの効果

認知諸機能の状態に応じた学習支援として、教材教具の開発や工夫を行った。たとえば、視覚認知に困難を示す対象者に対し、本人と一緒に視認性の高い学習プリントや宿題プリントを開発して使用する、上肢の動きに困難を示す対象者に対し、ホワイトボードの使用を促し、上肢の疲労を低減するなどの工夫を行った。また、小野ら (2017) を参考に認知諸機能のタイプに応じた指導方略を考案・実施した。以下では、研究協力者が本研究を通じて執筆した修士論文の中から、学習の開始と継続を促す遂行支援の具体例として、漢字書字指導 2 事例を取り上げ、習得度評価の結果と併せて紹介する。

対象者 B は漢字の実用性の認識が乏しいために、書字練習に取り組むことが困難な事例であった (押富, 2023)。指導者は漢字の実用性への気づきを促すために「ニワニワニワ、ウラニワニハニワニワトリガイル (庭には二羽, 裏庭には二羽鶏がいる)」 (中村, 1998) 等、漢字使用により解釈が容易になる文章を複数提示し、音読と内容説明を求める指導を行った。その結果、対象者 B は書字練習に取り組むようになった。また、対象者 B に対する聴取と質問紙調査の結果から、漢字の実用性への気づきが書字練習の開始に寄与したことが示された。さらに、指導者は学習会で学んだ漢字の使用例 (土居, 2021) を複数考えてくる宿題を提案し、宿題の遂行に対して称賛を行った。その結果、宿題に継続的に取り組むことができるようになった。さらに、指導期間前後に実施した漢字書字テストの結果から、新たに漢字 30 字を習得したことが確認された。

対象者 F は漢字書字の習得能力に自信がないために、漢字の書字や練習に取り組むことが困難な事例であった (岡澤, 2023)。指導者は、対象者の認知機能と漢字属性 (徳田, 1988) との関連を分析し、対象者にとって習得が容易な漢字から書字指導を開始した。また習得が容易な漢字属性を対象者に教示し、認知機能の特徴に応じた学習方法を提案した。その結果、指導経過において、自信がない漢字でも躊躇なく書字する様子が見られるようになり、宿題プリントを使用して、練習量を自己決定し、継続的に書字練習に取り組むようになった。また、指導期間前後に実施した STRAW-R の結果から、ターゲットとした学年段階の書取評価が「-1SD」から「平均」に上昇していたことが示された。

重要な領域における明確な目標設定とその達成に向けた課題遂行は自尊感情を高めること (Novick et al., 1996) が報告されている。教科学習の重要性を認識しながらも遂行に至らない子どもへ教科指導において、学習の開始と継続を促す遂行支援は特に重要であると考えられた。さらに、今回の教科指導を通して、定型発達児や他の障害状態の子どもを対象とした先行研究の知見は、健康障害児の教科指導に役立つことが示された。

② 自尊感情に対する教科指導プログラムの効果

表 3 は、各対象者の指導期間前後の自尊感情得点を年度別に示したものである。本研究では八島ら (2019) の自尊感情得点の平均値 (SD), 2.61 (0.55) を基準として、自尊感情得点が 1SD 以上低いものを低自尊感情、1SD 以上高いものを高自尊感情、1SD

表3 年度別指導期間前後の自尊感情得点及び段階評価の結果

年度	対象者	学年	自尊感情	
			指導期間前 (段階)	指導期間後 (段階)
2019	C	小学4年	3.50 (高)	3.83 (高)
	D	小学6年	3.33 (高)	3.50 (高)
	F	中学2年	2.67 (中)	3.33 (高)
	G	高校1年	4.00 (高)	4.00 (高)
	H	高校3年	1.50 (低)	2.33 (中)
2020	C	小学5年	4.00 (高)	4.00 (高)
	D	中学1年	3.67 (高)	3.50 (高)
	F	中学3年	3.50 (高)	2.67 (中)
2021	D	中学2年	3.50 (高)	3.17 (高)
	F	高校1年	3.00 (高)	3.33 (高)
2022	A	小学2年	1.33 (低)	2.67 (中)
	B	小学4年	3.83 (高)	3.50 (高)
	E	小学6年	3.33 (高)	2.83 (中)
	F	高校2年	3.00 (中)	3.00 (中)

以内のものの中自尊感情の3段階で評価し、段階比較を行った。その結果、指導期間後に段階が上昇したケースは2019年度の対象者FとH、2022年度の対象者Aの3例、低下したケースは2020年度の対象者Fと2022年度の対象者Eの2例であり、それ以外の9例は段階が維持された。また、指導期間後の段階評価において低自尊感情を示した者は存在せず、段階が低下した2020年度の対象者Fと2022年度の対象者Eの各自尊感情得点は八島ら(2019)の平均値2.61よりも高い値を示していた。以上より、今回適用した教科指導プログラムは、各対象者の自尊感情を少なくとも低下させるものではなく、自尊感情の維持・向上に寄与する可能性があると考えられた。

<引用文献>

- Dahlbeck, D.T., & Lightsey, O.R. (2008) Generalized self-efficacy, coping and self-esteem as predictors of psychological adjustment among children with disabilities or chronic illnesses. *Children's Health Care*, 37, 293 - 315.
- 土居正博 (2021) 小学校における学習者の意欲を喚起し漢字運用力に培う漢字テストの実践的検討―「他用例書き込み」漢字テスト実践の分析を手がかりに―. 国語科教育, 90, 53-60.
- Ferro, M. A., & Boyle, M. H. (2013) Longitudinal invariance of measurement and structure of global self-concept: A population-based study examining trajectories among adolescents with and without chronic illness. *Journal of Pediatric Psychology*, 38, 425-437.
- Harter, S. (1999) *The construction of the self: A developmental perspective*. Guilford Press.
- Lehtonen, A., Howie, E., Trump, D., & Huson, S. M. (2013) Behaviour in children with neurofibromatosis type 1: cognition, executive function, attention, emotion, and social competence. *Developmental medicine and child neurology*, 55, 111-125.
- 文部科学省 (2013) 教育支援資料～障害のある子供の就学手続と早期からの一貫した支援の充実～.
- 文部省 (1994) 病気療養児の教育について. 文部省初等中等教育局長 (通知).
- 中村亜希 (1998) 漢字の苦手な小学生への漢字指導―構造的な理解と記憶を中心に―. 市川伸一 (編) 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導. ブレーン出版.
- Novick, N., Cauce, A. M., & Grove, K. (1996) Competence self-concept. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept: Developmental, social, and clinical considerations* (pp. 210-258). John Wiley & Sons.
- 岡澤美歩 (2023) 学習障害児の対する漢字属性に配慮した指導. 上越教育大学大学院学校教育研究科発達支援教育コース特別支援教育領域令和4年度修士論文.
- 押富樹 (2023) 漢字書字に困難を示す児童の動機づけに配慮した漢字指導に関する事例研究. 上越教育大学大学院学校教育研究科発達支援教育コース特別支援教育領域令和4年度修士論文.
- 小野純平・小林玄・原伸生・東原文子・星井純子編 (2017) 日本語版 KABC-II による解釈の進め方と実践事例. 丸善出版.
- Pinquart, M. (2013) Self - esteem of children and adolescents with chronic illness: A meta - analysis. *Child: Care, Health and Development*, 39, 153-161.
- Sansom-Daly, U. M., Peate, M., Wakefield, C. E., Bryant, R. A., & Cohn, R. J. (2012) A systematic review of psychological interventions for adolescents and young adults living with chronic illness. *Health Psychology*, 31, 380-393.
- Schunk, D. H., & Zimmerman, B. J. (Eds.) (1998) *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice*. Guilford Press.
- 徳田克己 (1988) 弱視児の漢字読み書き能力. 文化書房博文社.
- 八島猛・菊池紀彦・大庭重治・葉石光一 (2011) 病弱教育の現状と自己概念. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 17, 39-44.
- 八島猛・大庭重治・野口和人 (2019) 青年初期の病弱児における自己評価の発達特性に関する横断的研究, 特殊教育学研究, 56, 257-267.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 八島猛・大庭重治・野口和人	4. 巻 56
2. 論文標題 青年初期の病弱児における自己評価の発達特性に関する横断的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 257 ~ 267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/tokkyou.56.257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八島猛・菊池紀彦・村上由則・野口和人	4. 巻 58
2. 論文標題 デュシェンヌ型筋ジストロフィー成人の主観的QOL 長期的予後を見据えた教育課題の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/tokkyou.58.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八島猛・葉石光一・大庭重治・池田吉史	4. 巻 26
2. 論文標題 大学生の主観的健康と目標意識,自己評価との関連 : 病弱教育に関する教育実践の基礎研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林圭介・八島猛
2. 発表標題 病弱児の学校適応に関する調査研究
3. 学会等名 日本発達障害学会第57回研究大会（Web開催）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 村上由則・八島猛・大江啓賢・菊池紀彦・寺本淳志
2. 発表標題 特別支援教育専攻学生対象の障害理解のための教材開発その10：COVID-19 下における病弱・肢体不自由教育における教材作製と活用
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会（Web開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木地平・八島猛
2. 発表標題 神経・筋疾患成人における主観的 QOL の規定要因
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会（Web開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 八島猛・櫻井理・菊池紀彦
2. 発表標題 Duchenne型筋ジストロフィーのQOL特性
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会（2019広島大会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上由則・菊池紀彦・八島猛・大江啓賢・寺本淳志
2. 発表標題 特別支援教育専攻学生を対象とした障害理解のための教材開発その9：教材作製を取り入れた授業改善の取り組み
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会（2019広島大会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 柳本雄次, 河合康	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 234
3. 書名 特別支援教育〔第3版〕	

1. 著者名 広岡 義之、林 泰成、貝塚 茂樹、大庭 重治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 特別支援教育の探究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

上越教育大学教育研究スタッフ紹介 八島猛 https://staff.juen.ac.jp/profile/ja.b0f482c89932fb2260392a0d922b9077.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	芦口 優音 (Ashiguchi Yuune)		

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	井口 あつ子 (Iguchi Atsuko)		
研究協力者	今井 里菜 (Imai Rina)		
研究協力者	岡澤 美歩 (Okazawa Miho)		
研究協力者	押富 樹 (Oshitomi Itsuki)		
研究協力者	黒川 健太郎 (Kurokawa Kentaro)		
研究協力者	小林 圭介 (Kobayashi Keisuke)		
研究協力者	小林 航平 (Kobayashi Kouhei)		
研究協力者	込山 萌 (Komiya Moe)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 地平 (Suzuki Chihei)		
研究協力者	豊泉 雄大 (Toyoizumi Yuudai)		
研究協力者	中川 未森 (Nakagawa Mimori)		
研究協力者	早瀬 雄太 (Hayase Yuuta)		
研究協力者	馬場 詠馬 (Baba Ema)		
研究協力者	松浦 克彦 (Matsuura Katsuhiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------